

2017年12月20日

放送倫理・番組向上機構  
放送倫理検証委員会 御中

株式会社 TBSテレビ  
情報制作局長 島田 喜広

### 放送倫理検証委員会決定後の取り組みについて

当社が制作している「ビビット」(当時「白熱ライブ ビビット」)は、2017年1月31日「多摩川リバーサイドヒルズ族 エピソード7」を放送しましたが、その放送に対して、同年10月5日、貴委員会より、明らかな放送倫理違反があったとの意見を受けました。この度の放送の表現・編集方法は、取材対象者であるホームレスの方の人格を傷つけるだけでなく、ホームレスの人々への偏見を助長する恐れがあり、その撮影手法には取材対象者との信頼関係を損ねる行為があったというご意見でした(放送倫理検証委員会決定 第26号)。また、今回の問題は、制作チームが陥った「集団的無意識」を根本から問うものだったとの厳しい指摘がありました。

以下、今回の決定を受けた当社の対応と取り組みについて、ご報告いたします。

#### 1 委員会決定に伴う放送対応

委員会からの決定を受けて当社では、以下のような放送対応を行いました。

1) 当日のニュース番組「Nスタ」および「ニュース23」内で、意見の概要と当社のコメントを放送しました。

##### (放送したコメント全文)

ホームレスの男性をとりあげたTBSテレビ「白熱ライブ ビビット」の放送についてBPO=放送倫理・番組向上機構は放送倫理違反があった、という判断を示しました。

「ビビット」は今年1月多くの犬を飼っているホームレスの男性をとりあげた際、この男性を「犬男爵」と呼んだうえで、極端なイラストを付けて、「人間の皮を被った化け物」などと放送していました。この放送についてBPOは「人間性を否定するような強烈な言葉だけをピックアップした編集や表現方法には弁解の余地がない」と批判。この男性が「す

ぐに怒鳴り散らす粗暴な人物」という印象を与えた編集についても、表現上の問題として見過ごせない、としました。

そのうえで、「放送はこの男性の人格を傷つけホームレスの人々への偏見を助長する恐れがある」として「放送倫理違反だった」との判断を示しました。

これに対してTBSでは「決定を重く受け止めています。再発防止を徹底し、より良い番組制作に努めて参ります」とコメントしています。

この内容は上記のニュース番組に加えて、当社のCS放送「TBSニュースバード」において合計4回（10月5日21時22分～）放送したほか、インターネットニュース「TBS NEWS」にも、10月5日から1週間に亘り掲載しました。

さらに11月5日の「TBSレビュー」でも同様の放送をしています。

## 2)「ビビット」での放送

当該番組である「ビビット」では、決定を受けた翌日の2017年10月6日の放送で、番組担当アナウンサーが以下のコメントを読み上げました。

### （放送されたコメント全文）

ホームレスの男性を取り上げた今年1月の私たちの放送について、BPO＝放送倫理・番組向上機構は昨日、「放送倫理違反があった」という判断を示しました。

私たちの番組は1月31日、多摩川河川敷で多くの犬を飼っているホームレスの男性をとりあげた際、この男性を「犬男爵」と呼んだ上で、別な男性の発言を引用して「人間の皮を被った化け物」などと極端なイラストを付けて放送しました。

この点についてBPOの放送倫理検証委員会は、「人間性を否定するような強烈な言葉だけをピックアップした編集や表現方法には弁解の余地がない」とし、「すぐに怒鳴り散らす粗暴な人物」という印象を与えた編集についても表現上の問題として見過ごせないとの意見を示しました。

そして、「ホームレス男性の人格を傷つけるだけでなく、ホームレスの人々への偏見を助長する恐れもある表現は不適切であり、放送倫理違反は明らかである」と結論付けました。

また、別の男性へのインタビューを、本人に断りも無く撮影し、放送した点についても「取材対象との信頼関係を損ねる行為であり、これも放送倫理違反と判断する」と指摘しました。

番組ではこの放送について、3月3日に謝罪放送すると共に、関係者の方々にお詫びを致しました。

私たちは今回の意見をしっかり受け止めて、こうした事が再び起こらないように努めて参ります。

### 3)「ビビット」HPでの告知

番組公式ホームページでも、上記内容を10月6日から1週間、10月13日17時まで掲載いたしました。

## 2 委員会決定の社内周知

BPOの決定を受けて、社内周知と問題点の共有を以下のように行いました。

### 1)「情報制作局特別セミナー」の実施

BPOの決定を情報制作局の制作現場に周知徹底するための、情報考査部による「情報制作局特別セミナー」を実施しました。セミナーの対象は情報制作局で番組制作に携わる社員67名と外部の制作スタッフおよそ600名で、「ビビット」の放送を視聴し、BPOの決定を配布して、問題点の共有を図りました。

セミナーは大人数による「講義形式」を避けて、議論がしやすい20~30人程度の少人数で行うことを原則としました。合計18回に及んだセミナーでは、少人数であることの利点を生かし、BPOの決定の周知のみならず、番組制作上の問題点や疑問点などについても議論し、より広い観点からの再発防止に取り組みました。

### 2)番組審議会への報告

番組審議会でも、2度にわたってこの問題を取り上げました。4月17日には、委員会での審議入りをうけて、TBSのBPO登録代表者である担当役員から、問題の要旨を説明しました。また委員会決定をうけて、10月16日、決定の内容と、TBSとしての受け止め、取り組み方針を報告いたしました。

### 3)「放送倫理委員会」における報告と議論

BPOの決定が出された翌日の10月6日に、放送番組の制作や取材における放送倫理や人権にかかわる諸問題を検討する社内の放送倫理委員会で、報告と議論を行いました。

放送倫理委員会ではBPOの決定についての説明と再発防止に向けた取り組みなどが報告されました。これを元に議論を行い、全社的なBPOの決定の共有と再発防止についての認識を深めました。

#### 4)「当事者から学ぶ人権セミナー」への参加

編成考査局審査部が主体となって全社的に開催している「当事者から学ぶ人権セミナー」へのスタッフの参加を促し、継続的に自発的に学ぶことを推奨しています。ちなみに委員会決定を受けたあと、スタッフが参加したのは以下のセミナーになります。

「ヘイトスピーチ～差別された側の思いとは」(10月6日)

「LGBTをめぐる表現と人権～保毛尾田保毛男問題をきっかけに」(11月29日)

### 3 貴委員会との「研修・意見交換会」の実施

2017年12月1日に、貴委員会より、鈴木嘉一委員、斎藤貴男委員、渋谷秀樹委員を招いての「研修・意見交換会」を開催しました。

「研修・意見交換会」には当該番組を制作した情報制作局のほか、編成局・報道局・制作局などからおよそ160人あまりが出席しました。

出席の3委員から意見書のポイントや決定の理由について詳しい説明を受けたあと、情報制作局から情報考査部長と3番組のプロデューサーも登壇し、パネルディスカッションの形式で意見交換をするとともに、参加者との質疑応答が行われました。

BPOの委員の方々からは、制作体制の課題や、バラエティ的な表現の危うさ、制作チームが陥った「集团的無意識」についての言及がありました。

「ある実態を実態以上に飾ると揶揄のステージに上る」

「報道は基礎票、情報番組は浮動票を取りに行くイメージ、だからこそ報道よりももっと深い取材と思索が必要では？」

「バラエティ的な演出は今の時代の肌感覚と合っているか？」

「集团的無意識に対抗する個人の意識向上が課題ではないか？」

など、いずれも委員からの厳しい指摘を頂きましたが、一方で制作者と伴走し寄り添おうとする委員の方々の思いもまた伝わりました。

参加者からは以下のような意見がアンケートに寄せられました。

「自分の価値感だけでなく、いろんな視点から考えてテレビを創っていかねばと改めて思った」

「視聴率優先で、バラエティ番組を参考にした構成作りが多く、演出と事実のバランスを取るにはどうしたらいいのか、課題を感じた」

「人権とは“相手と入れ替わったときどう感じるか”を考えると、と委員の方が仰ったのが大変わかりやすかった」

「一人一人の意識を高めること、それが組織の足腰を強くすることだと改めて感じました」

今回の研修会は、BPO の決定をただ表面的に受け取るのではなく、その真意を深く理解するために有意義であり、個々人が深く思索する場、或いはそのきっかけになる場となったと捉えれば、それこそが「集团的無意識からの脱却」の第1歩になりうる機会だったと考えています。

#### 4 総括

今年1月31日、私たちがあの放送を出してからまもなく1年が経とうとしています。「なぜあの放送が出てしまったのか」を関係者にヒアリングして、BPO に3月初旬に提出した報告書には、最後に次のように記しました。

「折りしも今回の問題は、これまでの“エッジの効いたVTRとスタジオトーク”を目指してきた内容から、“明るく優しい番組”をコンセプトにした内容に、番組が生まれ変わろうと準備していた矢先に起きました。10月(2016年)の大幅な人事異動も、4月からのリニューアルを目的として行ったものでした。

私たちは、このタイミングで起きた、今回の事態を改めて肝に銘じ、真に“明るく優しい番組”として、今後『ビビット』を育てていきたいと考えています。」

ほぼ1年を経て、随分、番組は変わったと自負しております。

リスクマネジメントに重きを置いた制作体制の構築・情報の質の管理と演出の域とのバランス感覚のあるスタッフィング・スタッフの人権意識向上・自由に発言ができるチーム作りなど、報告書で課題とされた事に一つ一つ取り組んでまいりました。

貴意見書は次のように締め括られています。

「『ビビット』の制作チームが陥った『集团的無意識』の落とし穴をどう乗り越えていくかも、現場レベルで議論し、一人ひとりが『わが事』として考えてほしい。そして今後は、世間の出来事や関心事を身近な語り口で伝える情報番組ならではの可能性を広げるべく、本件放送の反省と教訓を生かすよう願っている。」

今回の放送は許されるものではありませんでしたが、番組がよりよい方向に向かう契機となりました。

「集团的無意識」を乗り越えることは決して簡単なことではないと思いますが、見てくださる方を想像しながら作ること、志を忘れないこと、自分を疑うこと、丁寧に作業すること、そうした一つ一つの積み重ねが肝要なのだと思います。そうした積み重ねがあっはじめて、私たちが目標とする信頼度と好感度の高い愛される番組はできるのだと思います。

今回の放送の反省を忘れることなく、日々努力していく所存です。